

●大友、島津軍を供養

川南町は、尾鈴山系の上面木（じょうめぎ）山（七七七）のふもとに広がる。同町村上の町営牧場付近から眺めると、日向灘に向かって緩やかに大地が傾斜。よそから来た人たちがここに立つと、異口同音に「宮崎は広い」と驚くという。

その川南町の大地が十六世紀末の戦国時代、戦場になった。天正六（一五七八）年十一月、日向に侵攻した豊後・大分の大友宗麟の軍勢と、これを迎え撃つ島津勢が高城（木城）川原で激突。敗れた大友勢は川南の原野を敗走、島津勢が耳川まで追撃する戦況となり、川南一帯に多くの戦死者が出た。

「日向国史・下巻」は、そのときの激戦の模様を「高城より七里の間両軍の伏屍千余、美々川に溺死するもの亦算なし」と記している。戦いの後、島津氏は敵味方の区別なく死体を収容、

同町西別府の近くに埋葬した。

合戦から七年後の天正十三（一五八五）年、ここに六地藏の石塔が建立され、盛大な供養祭が行われた。当時の高城地頭・山田新介が、宮崎から船で運ばせて建立したことが知られている。その後石塔は国指定史跡となった。

地元ではこの石塔を「かんかん仏」と呼び、付近を「宗麟原」と呼ぶようになった。現在、毎年十一月十二日に供養祭が行われている。

供養祭では近くの多賀小学校児童による「かんかん音頭」が披露される。同小は郷土の歴史である宗麟原のことを総合学習に取り入れ、児童たちに歴史の重みを知ってほしいと二〇〇一（平成十三年）年、独自に「かんかん音頭」を作った。祭りの日、児童たちは「島津大友宗麟原で、戦い果てたる八千の、成仏とむらい踊ろじやないか」の歌に合わせながら踊る。祭りには敵方

だった大分からも関係者が訪れ、川南の人たちの手厚い供養に感謝しながら、時代を超えて交流を深めている。

この付近には前方後円墳二十基、円墳三十五基から成る「川南古墳群」があり、国指定史跡となっている。

かつて日本有数の開拓地として知られた川南町は、今では畜産、果樹、野菜など宮崎の食料基地となった。砂浜が広がる伊倉浜自然公園には、サーフィンセンター、ログハウス風の宿泊施設、シャワールーム、休憩室などが整い、若者に人気がある。

県の中央部。川南町は古いものと新しいものを混在させながら飛躍を目指す。

甲斐亮典



宗麟原供養塔。今も往時の激戦の模様を伝える